

「八十里越観光圏の共創と八十里越ハンドブックの作成・刊行

—新潟県央と福島県南会津に跨る観光資本の創造—

NP0 法人西潟為蔵会 理事長 弥久保宏

1 事業の背景と目的

(1) 事業の背景

八十里越の開通は令和9年夏頃と言われ、あと2年余りに迫っている。しかし、これまで実施した関係自治体や団体への面談調査では、この開通を地域振興に活かす具体的構想に着手しているのは、三条市と只見町のみである。県央地域のその他の自治体や南会津地域の自治体は、関心はあるが、未だ構想さえも立案していないのが実情であることが分かった。

更に各自治体の観光戦略では通過点で終

わらず、現地に宿泊させることが大きな課題となっている。しかし、自治体個々の観光案内だけではアピール不足である。関連自治体に点在する観光スポットを一つの広域観光圏として集約し、ハンドブックの編集で案内できれば、単なる通過スポットに留まらず、宿泊観光に繋がることが期待される。しかし、八十里越を一つの広域観光圏として構築する構想や、集約した観光ハンドブックを作成・刊行するプロジェクトは不在である。こうした課題等を解決することが本事業発案の背景となっている。

(2) 事業の目的

八十里越を観光資源として関東圏などの遠方や海外からの観光客（インバウンド）を呼び込む為には、ヨーロッパのモンブラン観光圏（3ヶ国に跨る）のように広域的な観光圏を構築して、観光資源の共有化とブランド化が大きな鍵を握ることになる。こうした問題意識から八十里越開通までの短期間に両県に跨る関係自治体やその関連団体を迅速に束ねる役割を果たせる組織の必要性が望まれている。そこで、当NP0法人がその役割を果たし、新たな広域観光圏「八十里越観光圏」の構築とそのハンドブックを関係自治体や団体と共創することを事業目的とする。

2 事業内容

当NP0法人が、新しい広域観光圏である「八十里越観光圏」に関わる新潟県央地域と福島県南会津地方の関連自治体、団体を束ねるプラットフォームとしての役割を果たし、その見取り図となるハンドブックを作成する。これまで、新潟県三条市と福島県只見町で実施したフィールドワークの成果をフォーラム開催等で提言を行ってきた。その結果、三条市と只見町の自治体と関係団体が連携して観光促進を行うプロジェクトを生み出すことになった。

この成果を本事業の実施によって、八十里越に跨る三条市と只見町を核としつつ、観光圏の枠を更なる広域に広げて参加自治体数を増やすことを目的としている。現在「八十里越観光圏」の構築に参加予定の自治体は、新潟県側は、三条市、燕市、加茂市。福島県会津側は、

只見町、南会津町、金山町に増えている。歴史の道八十里越を観光資源とする自治体を単体から複数に増やし、新しい「八十里越観光圏」という観光ブランドを生み出すことを目的とする。観光圏が広域化されることによって、その観光圏内の観光スポットが多種多様にハブ化され、観光の単なる通過点に留まらず、宿泊を伴った観光インフラの整備が促進される。併せて、この観光圏のハンドブック作成過程に地域の将来の担い手となる地元の小中学生が参加することによって、持続可能な地方創生の人的資源作りにも大きく寄与することを目指す。

事業の具体的な取り組みとして、まず、「八十里越観光圏」に参画してもらう自治体の首長を始め、教育委員会、観光協会、商工会等へのフィールドワークを実施し、「八十里越観光圏」とその見取り図となる「八十里越ハンドブック」発刊についての意見交換を行った。同時にフィールドワークを通じて必要となった文献資料の収集と研究を通じて歴史文化についての知見を深めた。

次にこれらのフィールドワークを通じて得られた成果を三条商工会と只見町商工会の交流懇談会で報告し、関連諸団体との協働で取り組む具体的プロジェクトにすることに努めた。最終的にこうしたプロジェクトを広く、市民へ伝えるための地方創生フォーラムを実施し、マスメディアの取材を通じて、プロジェクトの意義を広く社会へ周知することが出来た。

（１）フィールドワークの概要

①三条市経済部営業戦略室と会合（４月）

三条市の観光部門である経済部営業戦略室と「八十里越広域観光圏」の観光ガイドとなる『八十里越ハンドブック』のコンテンツや参加団体への連携を巡って意見交換。

②「ドラマチック八十里越―地域観光新発見プロジェクト―」の協力団体として当NPO 法人が参画（６月～１１月）

他団体の上記事業へのアドバイスや八十里越と西潟為蔵をテーマとしたバスツアーガイドを当NPO 法人の会員が担当し協力を行った。当プロジェクトが１１月にテレビ放映化された際に当NPO 法人が番組監修を行った。

③三条高校社会人講義で講演（７月１９日）

三条高校が実施している社会人講義に講師として参加し、地域探求型授業で地域振興を調査学習している高校生達と『八十里越ハンドブック』で連携する可能性を探った。その際に下田地域の観光資源を調査しアピールするグループの賛同を得るが、生徒達の受験勉強との兼ね合いから、調整中である。

④三条市商工会と八十里越交流事業についての意見交換（８月２８日）

三条市商工会下田事務所で事務局次長、斎藤弥氏と１０月に実施される三条市商工会・只見町商工会「八十里越交流事業」に向けて、八十里越観光圏と『八十里越ハンドブック』に関する提言を行う意見交換。商工会も地域振興へ大きな効果が望めると今後も連携して進めることになった。

⑤ 西潟為蔵展（８月２７日～１０月２７日） 当NPO 法人と三条市の共同主催による企画展。郷土の偉人、西潟為蔵の没１００周年を契機に西潟の功績をその遺品や歴史的資料を展

示。

とくに、当事業のテーマである八十里越に関して、明治期の開削関連資料を中心に八十里越と西潟為蔵をテーマとし、地方創生の歴史的資源の意義をこの展示企画展によって周知効果を期待した。期間中の来館者は約 2800 人に及び、西潟為蔵と八十里越開通との相乗効果が発揮された結果となった。

⑥福島県南会津町町長との面談協議及び文献資料収集（令和 7 年 2 月 11 日）

渡部南会津町長と意見交換し、八十里越観光圏の共創と「八十里越ハンドブック」の作成に関して賛同を得ることが出来た。特に地域の将来の担い手となる子供達の参画には、持続可能な地域づくり上、大いに意義があると評価を得た。こうした企画の関連として当 NPO 法人が今年秋に計画している地方創生フォーラムの登壇者としての内諾を得ることが出来た。

⑦只見町町長、教育委員会及び関係者との面談協議及び文献資料収集（令和 7 年 2 月 12 日）

只見町役場において、渡部長等を始め教育長らと只見町に対して昨年来、提案し続けてきた「八十里越観光圏」の共創と「八十里越ハンドブック」の刊行に関して改めて賛同を得る。とくに、「八十里越ハンドブック」をふるさとう納税の返礼品とともに納税者へプレゼントする構想に乗り気で、こうした取り組みに今後も積極的に協力するとの賛同を得た。南会津町の町長と同様に、秋の地方創生フォーラムに登壇者として参加し、以上の企画に対する取り組みを強化したいとの申し出を得ることが出来た。

3 『八十里越ハンドブック（仮称）』編集委員会の立ち上げと企画会議

『八十里越ハンドブック』の企画、編集に関する会合を 5 月に三条市で開いた。その後出版事業者と『八十里越ハンドブック』の作成に向けた会合をもち、編集出版費用の見積もりや執筆編集の工程表の協議に入った。参加自治体や団体の絞り込みの必要性から随時、企画編集会議を行うことを決め、予算に関しては関係自治体、観光協会、商工会などの団体に協力を求めることとした。令和 7 年度から編集委員会を中心に具体的な原稿依頼を行い、編集会議を随時進めることを決定している。

4 三条商工会・只見町商工会「八十里越交流懇談会」への参加（10 月 19 日）

三条商工会、只見町商工会が毎年実施している八十里越交流懇談会。八十里越を挟んで県境を跨ぐ「八十里越観光圏」の自治体、国道事務所、地域振興局等で八十里越全通を関連広域自治体で地域振興に活かす意見交換。ここ数年この交流事業に NPO 法人としては当 NPO 法人だけが招待されており、懇談会で「八十里越ハンドブック」の進捗状況を報告。R7 年度の交流懇談会で「八十里越ハンドブック」の最終的な章立て、執筆依頼先、経費の分担等を報告することになった。

4 地方創生フォーラムの実施

地方創生フォーラム「郷土の偉人と地方創生」10 月 27 日（日）実施

明治期八十里越開削に私財を投じて実現させた偉人、西潟為蔵（三条市出身）の功績に光を当てて、地方創生の歴史的資源として活かす取り組みを提案するフォーラムを開催した。このフォーラムでは吉田東伍（阿賀野市）を資源として社会教育的効果を生み出している事例を吉田東伍記念博物館元館長、渡辺文男氏の基調講演を基にパネルディスカッション

ョンで実施。このパネルディスカッションの中で、八十里越周辺の複数自治体で広域観光圏「八十里越観光圏」を共創し、その観光圏を俯瞰し、観光の見取り図となる「八十里越ハンドブック」の企画、発行を提案し、賛同を得た。またこのフォーラムの内容は地元新聞にも取り上げられ、提言を市民へも広げることが出来た。

5 事業成果

(1) 広域観光圏「八十里越観光圏」の共創に関する事業成果

フィールドワークによる働きかけを通じて、関係自治体の首長をはじめ、各団体も総論賛成の体制を築き上げることが出来た。次のステップは、これまでの各自治体単体でアピールしてきた特産品や観光スポットを新たな「八十里越観光圏」としてリニューアルする為に、取り組むべき課題が明確となった。

(2) 「八十里越ハンドブック」の作成・刊行に関する事業成果

フィールドワーク、商工会交流懇談会、地方創生フォーラムを通じて、類似するハンドブックをモデルとして章立て等の素案を準備した。このハンドブックが「八十里越観光圏」を俯瞰できる見取り図となる意義は、ほぼどの関係団体も賛同してくれた。こうした機運に乗り、既に編集委員会を立ち上げ、出版業者からの経費見積もりも用意することが出来た。次の段階は、ハンドブックの章立てと項目ごとの執筆の割り振りを精査する作業に入ることになる。そして、経費を各団体からどのような比率で集めるかが課題となる。

6 今後の取り組み

事業成果のところで次の課題となったこと案件が、今後の取り組みとして実施されることになる。従来の各自治体単体での観光や特産品のアピールを「八十里越ブランド」としてアピールする戦略が求められる。この課題解決の取り組みとして、単体観光圏のブランドとして残すものと八十里越ブランドとして新たに生み出すもの。特に特産品に関しては、すでに三条市と只見町で実施されている協働による新たな特産品の創設で一つの方法として有効と思われる。三条市下田地区の米を原料に只見町の醸造所が製造した焼酎「しただみ」はその代表作である。八十里越観光圏内のこうした協働によって生み出される新たな特産品のブランド化の重要性をフィールドワーク、商工会交流懇談会、地方創生フォーラムを通じて具体化して行くことを考えている。

また、「八十里越ハンドブック」の刊行については、編集会議を重ねて章立てと執筆の割り振りを関係者へ提案し、編集の上、取りまとめてゆきたい。とくに地域の将来の担い手である地元中学生の参画においては、まず各教育委員会を通じて参画校を絞り、担当の先生たちと密接な連携を取りながら行いたい。そして、最終的には既述したようにこのハンドブックをふるさと納税の返礼品と一緒にプレゼントすることで、八十里越観光圏への呼び水とし、交流人口、関係人口の増加につながる意義を訴えてゆく予定である。

以上の今後の取り組みを本年5月か6月に予定されている「越後・南会津街道観光円卓会議」で提案することを予定している。